

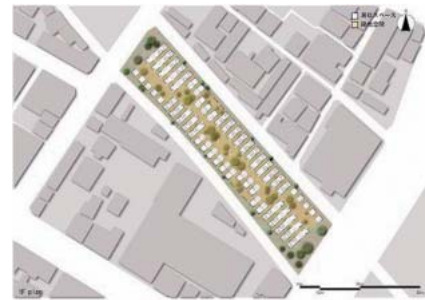
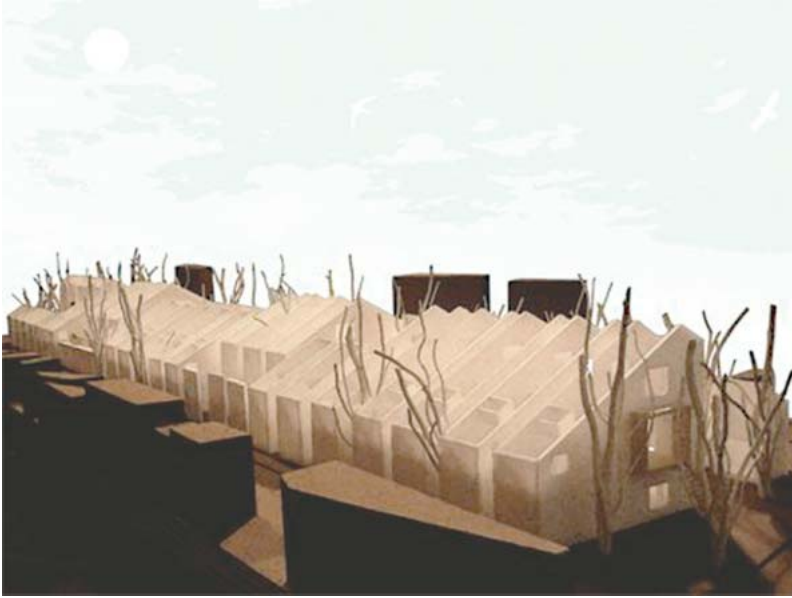


集積する集落美術館

飯田市中心市街地の再開発における集住の可能性

熊谷 幸亮 (くまがい こうすけ)

千葉大学 工学部 都市環境システム学科



近年、長野県飯田市の中心市街地は居住環境の整備のため、急速に再開発を展開させている。しかし、居住環境の整備により建設された集合住宅は、セキュリティが高められ、周囲に対して閉じたものばかりである。そこで、本計画では、まちに対して切り開くカタチの集合住宅を提案する。人やモノが集積する集合住宅において、共有する空間を路地として定め、生活範囲を外部へ流す。自ずと居住者はテリトリーを求めため、美術・芸術品や家具などは路地に満ち溢れていく。所有するモノや生活形態の異なるそれぞれの居住者が集積し、ひとつの路地はつくられる。路地は、まちに対して切り開き、他者も入り込める。そこは、生活風景とモノが混在し、日常の中に落とし込まれた美術空間となる。



講評 地域における「安全・安心」とは、そこに生活する人々による日常的な見守りによって成立していたのではないかと思います。この作品の敷地は長野県飯田市、中心市街地に位置する中央公園への提案である。周辺で急速に進められている集合住宅において、これらの建物は外に対して閉じ、機械システムによるセキュリティ管理方法がとられている。作者はこのような現状に疑問を感じ提案をしている。住居を「プライベート」と「セミプライベート」に分け、再構成している。最近の流行りだと、それらのボリュームをランダムに配置して視覚的な面白さをねらった手法が多くみられる中、あえて端正な形態を規則正しく配列し、背景としての建築に徹している。こういった提案の実現が、もしかすると開かれつつ守られているということを可能にするのかもしれない。

(審査員：中野 正也)